

目的 従来、ヒトが快適と感じる衣服内気候は温度 32 ± 1 ℃、湿度 $50 \pm 10\%$ の状態とされているが、この関係が非定常の場合は成り立たない(横山、1987)も示唆されている。衣服内気候と着用快適性の関係をさらにはっきりさせるため、日常生活の身体活動の違いや、一日の時刻によりどのように影響を受けるかを調べる事を目的とする。

方法 被験者2名について、2種類の衣服を用いて実験した。夏の日常生活を想定し、環境温度 $29 \sim 32$ ℃・環境湿度 $44 \sim 71\%$ RHの室内で原則として安静を保ち、午前と午後30分間の歩行運動を行った。実験は午前10時～午後6時に行い、その間衣服内温湿度・直腸温をテレメータにより連続測定し、着用感(快適感、湿潤感、温熱感)アンケートを安静時には30分毎、運動時及び回復期には15分毎に行った。

結果 1)歩行を開始するとbody motionによる換気のため衣服内温湿度の急激な下降が見られ、着用感は快適の方に向うが、回復期においては衣服内温湿度の上昇が見られないにもかかわらず(下降している時でさえ)、着用感が不快の方に向う場合が見られる。この事は、運動時と回復期では衣服内温湿度と快適性の関係に違いがある事を示している。2)一日の時刻による違いが見られた。午後(13:30～14:30)と夕刻(17:00～18:00)では、衣服内気候はほぼ同じにもかかわらず、夕刻の方がより快適に感じる事が明らかになった。この事は衣服内気候と着用快適性を考える場合、時刻のファクターを考える必要がある事を示す。1)・2)の結果から衣服内気候のみで着用快適性を論じる際には慎重な配慮が必要な事を示唆している。